

5月は開花や新梢伸長の時期にあたり、各樹種の生育状況に応じた防除が必要となります。近年は温暖化により植物の生育や病害虫の発生時期が早まる傾向にあるため、園地や周辺の状況をこまめに観察し、適期防除を心がけましょう。

### 「果樹全般」

#### ●果樹カメムシ類

農業技術防除センターが行ったチャバネアオカメムシの越冬調査（表1）の結果、8月上旬ごろまでの発生量は平年より多く、樹園地への飛来量も多くなると予想されます。5月に飛来量が増加するとウメ、モモ、キウイフルーツ等の落葉果樹の果実のほか、カンキツの花や新梢も被害を受けます。飛来状況は、地域、園地、園内の場所および樹種によって異なるため、発生動向に注意するとともに、園地をよく観察し、飛来を確認したら早急に防除を行ってください。

表1 チャバネアオカメムシの越冬状況<sup>1)</sup>(R7年12月採集)

調査地域	R8	平年 <sup>2)</sup>	前年 (R7)	多発年 (H30)
	頭/m <sup>2</sup>	頭/m <sup>2</sup>	頭/m <sup>2</sup>	頭/m <sup>2</sup>
みやき町	4.3	0.4	0	1.0
神埼市	11.7	0.6	0.7	0.7
佐賀市	2.0	0.2	0.3	0
小城市	0	0.1	0	0
多久市	0	0.2	0	1.0
唐津市1	4.0	0.5	0	0
唐津市2	0.3	0.3	0	0.3
伊万里市1	1.0	0.0	0	0
伊万里市2	2.3	0.4	0	0.7
伊万里市3	0.7	0.3	0	1.3
武雄市1	2.0	0.2	0	0.3
武雄市2	0.3	0.5	0.3	1.3
鹿島市1	1.0	0.5	0.7	1.3
鹿島市2	2.3	0.7	0.3	2.7
鹿島市3	1.3	0.4	0	0.7
太良町1	1.0	0.0	0	0
太良町2	8.3	0.4	0	1.3
平均	2.51	0.32	0.14	0.70
越冬地点率(%)	88.2	44.1	29.4	68.4

1) 各地点3カ所(1m<sup>2</sup>/1カ所)の落葉中の越冬虫数の平均

2) 平年値はH28～R7の10年間の平均

※病害虫発生予察注意報第4号（R8年3月25日、佐賀県農業技術防除センター）より

### 「露地カンキツ」

## ●開花期前後の病害虫防除

満開期～落弁期は、灰色かび病、そうか病、黒点病の防除時期です。本年は裏年傾向で着花量が少なくと予想されるため、少しでも着果量を確保するためには開花期からの防除が重要です。昨年は灰色かび病の発生が多く、さらに他県ではそうか病の発生も増加しているため、表2を参考に確実に防除を行ってください。防除適期は落弁期ですが、灰色かび病が問題となる園地や着花が多い園地では、満開期にも防除を行きましょう。

なお、ハダニ類の発生が認められる園地では、マシン油乳剤 200 倍を混用してください。近年、樹勢の低下により冬～春の銅剤やマシン油乳剤の使用を避けている園地が散見されますが、そのような園地では葉面散布剤を施用する等樹勢の回復に努めてください。

表2 露地カンキツの満開期～落弁期の防除

散布時期	対象病害	薬剤名	FRAC
満開期	そうか病 灰色かび病	フロンサイド SC	29
		ストロビードライフロアブル	11
		ナリア WDG	11+7
		ファンタジスタ顆粒水和剤	11
		フルーツセイバー	7
		ナティーボフロアブル	3+11
		パレード 15 フロアブル	7
落弁期	そうか病 灰色かび病	ストロビードライフロアブル	11
		ナリア WDG	11+7
		ファンタジスタ顆粒水和剤	11
		フルーツセイバー	7
		ナティーボフロアブル	3+11
		パレード 15 フロアブル	7
	(黒点病)	黒点病も防除する場合は、 <u>ジマンダイセン水和剤・ペンコゼブ水和剤</u> または <u>エムダイファー水和剤</u> を混用する	

※佐賀県病害虫総合防除計画より引用

※殺菌剤耐性菌対策委員会（FRAC）が定めた作用機構に基づく分類コード

## ●カイガラムシ対策

近年、ナシマルカイガラムシやアカマルカイガラムシ等のマルカイガラムシ類による被害が増加して

います。既に多くの皆様は12月～3月のマシン油乳剤単用散布や4月のアプロードフロアブル+マシン油乳剤混用散布を実施されているかと思いますが、多発生園ではこれらの対策のみでは十分な防除効果が得られないことがあります。昨年果実被害が多かった園地や、上記の対策を実施されていない園地については、マルカイガラムシ類第1世代歩行幼虫の発生盛期である5月下旬～6月上旬に、アプロードフロアブル（水和剤）1,000倍、モベントフロアブル2,000倍、エルサン乳剤1,000倍、トランスフォームフロアブル1,000倍等を用いた防除を確実に行ってください。その際、4月の混用散布を実施された園地については、感受性の低下を避けるため5月はアプロード以外の薬剤を使用してください。

なお、モベントフロアブルは効果が遅効的なため他剤より1～2週間ほど早く、歩行幼虫の発生初期をねらって散布すると効果が安定します。

### ●チャノキイロアザミウマ対策

カンキツでの被害が顕著になるのは6月上中旬ごろですが、多発園では5月中下旬ごろから被害が発生することがあります。特に、園地周辺に増殖源となるイヌマキ、サンゴジュ、マサキ等が植栽されていると多発しやすいため、アクタラ顆粒水溶剤2,000倍やモスピラン（SL液剤、顆粒水溶剤）2,000倍、ロディー乳剤2,000倍による防除を行ってください。

「ハウスミカン」

### ●ミカンハダニ対策

収穫2か月前を目安にダニオーテフロアブル2,000を散布ムラが無いように丁寧に散布します。ただし、銅剤を使用した園地では効果が低下する可能性があるため、他剤を用いましょう。

なお、ハダニ類の殺ダニ剤に対する感受性は園地によって異なることから、過去に使用した際の防除効果の有無を参考にして薬剤を選択してください。また、薬剤感受性の低下を避けるため、同系統の剤の連用は絶対にしないでください。

### ●アザミウマ類対策

アザミウマ類の侵入を防ぐため、開放部に光反射シート織り込みネットや赤色防虫ネットを設置しましょう。さらにハウス周囲に1～2m幅のタイベックシートを敷くとより効果的です。また、ハウスミカンで問題となるミカンキイロアザミウマやネギアザミウマはハウス内外の雑草でも増殖するため、こまめな除草で増殖場所を無くしましょう。

なお、アザミウマの種類によって効果的な薬剤が異なりますので（表3参照）、粘着トラップ等により種類の確認を行いましょう。種類の確認方法が分からない場合は、地域の振興センターやJA等の指導機関に問い合わせてください。

表3 ハウスミカンのアザミウマ類防除薬剤

アザミウマの種類	薬剤名	IRAC※ コード	希釈倍率	収穫前日数
ミカンキイロアザミウマ 及びネギアザミウマ	ディアナ WDG	5	10,000 倍	前日まで
	スピノエースフロアブル	5	4,000 倍	7日前まで
	ファインセーブフロアブル	34	2,000 倍	7日前まで
	アベンジャーフロアブル	34	2,000 倍	7日前まで
ミカンキイロアザミウマ	コテツフロアブル	13	2,000 倍	前日まで
ネギアザミウマ	ハチハチフロアブル	21A	2,000 倍	前日まで

※殺虫剤抵抗性対策委員会（IRAC）が定めた作用機構に基づく分類コード

「ナシ」

#### ●黒星病対策

摘果期以降はキノンドーフロアブル 1,000 倍やベルコートフロアブル 1,500 倍、デランフロアブル 1,000 倍等の予防剤を主体に防除を行います。DMI 剤（FRAC コード：3）は、耐性菌の発生リスクがあることから5月上旬～6月中旬の使用は控えましょう。ただし、本病の発生が認められた場合には DMI 剤を直ちに散布してください。

なお、摘果前は薬剤の付着ムラが起きやすいため、摘果作業を早め実施しておくことも病害を防ぐうえで重要なポイントとなります。

また、トンネル栽培では、ビニール除去の直前または直後には必ず本病の防除を行ってください。

#### ●ナシヒメシンクイ対策

ナシヒメシンクイ対策として、5月上中旬に交信攪乱フェロモン剤を設置します。設置の注意点については4月号の特集記事を参考にしてください。資材はコンフューザーNとナシヒメコンの2種類があります。コンフューザーNは効果の持続期間がやや短い代わりにハマキムシ類等にも効果があり、ナシヒメコンはナシヒメシンクイにしか効果が無い代わりに効果の持続時間がやや長いといった特徴があるため、これらの特徴を把握した上で利用してください。

フェロモン剤は3～4ヶ月ほど効果が持続しますが殺虫効果はないため、園外で交尾した雌成虫が園内に侵入・産卵して被害が発生する可能性や、モモノゴマダラノメイガ等のようなフェロモン剤の効果がない害虫による被害が発生する可能性があります。園地を確認し、被害の発生が認められたら薬剤防除を行きましょう。

「ブドウ」

### ●べと病対策

開花期前後からの防除を徹底します。本病が多発すると、早期落葉を引き起こし、糖度低下や着色不良、新梢の充実不足等につながります。多発生する園地では、開花直前にキノンドーフロアブル 600 倍やデランフロアブル 1,000 倍、落弁期～顆粒小豆大期に浸透移行性の高いリドミルゴールドMZ 1,000 倍やベトファイター顆粒水和剤 3,000 倍等を散布します。

### ●晩腐病対策

露地ブドウなどで、昨年本病が発生した園地では特に防除を徹底します。落弁期～顆粒小豆大期に、アミスター10 フロアブル 1,000 倍等を散布します。散布ムラがないように丁寧に、棚上からも散布をしてください。

また、雨滴とともに菌が袋内に侵入しないよう、梅雨が来る前に、早めに袋掛け作業を行い、袋の止め口はしっかりと締めましょう。

### ●チャノキイロアザミウマ対策

落弁期から小豆粒大期まではスカウトフロアブル 2,000 倍、ダントツ水溶剤 4,000 倍等を、大豆粒大期は果粉の溶脱や果面の汚れが少ないアディオンフロアブル 1,000 倍を散布します。5月から6月にかけては園地周辺からの飛び込みも増加するため、防除は2週間おきを実施してください。

また、本虫は新葉で増殖しやすいため、副梢の摘芯を徹底するとともに、副梢に着生する2番花（果房）は見つけ次第剪除してください。特にシャインマスカットは本種の被害を受けやすいため、これらの対策に加え、袋掛け後も2～3回薬剤防除を行ってください。

「カキ」

### ●炭疽病対策

5月上旬にジマンダイセン水和剤 500 倍を散布し、その後は、累積降雨量 150～200mm を目安に追加散布を行います。樹の上部まで十分に薬液が付着するようにしてください。

本病は、病斑上に形成された分生子が雨滴により飛散して伝染します。新梢に発生した病斑は、重要な伝染源となるので、新梢に発生を確認した場合は早急に取り除いてください。

「キウイフルーツ」

### ●灰色かび病対策

幼果に付着した花卉に灰色かび病が発生すると、落果したり、果面に傷がついたりします。落弁期には、ロブラール水和剤 1,500 倍などの薬剤を丁寧に散布してください。

### ●かいよう病対策

発生の有無にかかわらず、すべての園地で必ず防除を行いましょ。6月まではコサイド3000 2,000倍（クレフノン200倍加用）による定期的な薬剤防除（1回/月）を行います。

5月は葉の褐色斑点症状や新梢の枯死が生じやすくなります。園内を観察し、症状があれば早急に除去してください。管理作業による感染を防ぐため、切除に使用した器具などはエタノール70%や次亜塩素酸ナトリウム0.02%などの消毒液での消毒を徹底してください。

### ●クワシロカイガラムシ対策

5月は本虫の重要な防除時期です。アプロード水和剤1,000倍を散布ムラがないよう丁寧に散布してください。